

地域デザインに必要とされるスキル養成科目の効果と課題（その2） —対面・オンラインのハイブリッド実践を通じて—

Effects and Issues of “hybrid” active learning for Social Skills for Regional Design

若園 雄志郎¹・白石 智子²

WAKAZONO Yushiro, SHIRAISHI Satoko

本研究で考察対象としている「ソーシャルスキル演習」は、宇都宮大学地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科における2年次必修科目であり、地域における様々な課題に柔軟に対応できる汎用的スキルの養成を目指すものである。2017年度より開講されており、その授業内容や効果、課題について、これまで継続的に実践報告を行ってきた。本研究では、2021年度に実施した対面とオンライン授業を組み合わせたハイブリッド授業について、受講生の自己評定を基に、2020年度以前との比較を含めて考察を行うものである。結果として、評定項目「プレゼンテーションの内容について自分が十分理解すること」については高い数値が見られ、またその他の項目についても数値の低下が見られなかったことから、ハイブリッド授業には一定の効果が認められることが指摘できる。

キーワード: アクティブ・ラーニング、対面授業、オンライン授業、ハイブリッド授業、ソーシャルスキル、地域

I. はじめに

本研究では、コミュニティデザイン学科の専門科目「ソーシャルスキル演習」(AL80¹、コミュニティデザイン学科2年次必修科目)について、アクティブ・ラーニングの発展および新たな手法の開発のための基礎的な研究としての教育実践を報告し、その効果についての分析を行ってきた²。また、これと関連が深い「ワークショップ演習」(AL80、コミュニティデザイン学科および建築都市デザイン学科3年次必修科目、社会基盤デザイン学科3年次選択科目)に関して、関連する科目を適切に位置づけた上で学生の意欲や関心を引き出し、学問的・技術的に成長させていくことが重要であるという観点から、それぞれを受講した学生がどのような自己評価を行ったかについても分析を加えてきた³。これらの分析は当該年度だけではなく、継続的に検討を行い、評価していくことにより、授業内容や指導法等の改善を蓄積できるという点においても重要であるといえる。

「ソーシャルスキル演習」の授業目的は「まちづくりの現場などの現実社会で行われている、人と人との関わりや、そこでの主体形成と合意形成などについて、それらを効果的に行うための能力を獲得することを目標とする」としているため、いかに人と人とのつながりや関係性をつくっていくかを学修することが不可欠であり、これまではそれが「対面」にて行われることが自明のものと

¹ 宇都宮大学地域デザイン科学部准教授 pontono@cc.utsunomiya-u.ac.jp

² 宇都宮大学地域デザイン科学部准教授 shiraishi@cc.utsunomiya-u.ac.jp

して考えられてきた。しかしながら、2020年度に関しては新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策により対面による演習が不可能となり、2021年度では一部対面授業が再開したものの、感染拡大状況によって常にオンライン化を念頭におきながら実施することとなった。

一方で、対面とオンライン授業の「ハイブリッド化」は一過性のものではなく、効果的に組み合わせることで、より学修が深まっていく効果もあると考えられる。2020年9～11月に朝日新聞社と河合塾による共同調査「ひらく 日本の大学」では、「遠隔授業を実施して良かった点」として、「授業内容を見直すきっかけとなった」という回答を9割近くの大学が選択しており、また、「学生の授業参加」についても天候や居住地からの距離、精神的な問題による影響が少なくなったことも挙げられていた⁴。一方で、授業の双方向性として、学生からの質問や大勢の学生とのやりとり、動画での予習と授業での議論の増加・活発化については、入学定員が多い(3000人以上)場合は良い結果となっているが、入学定員が少ない大学ほど期待した効果が得られていないという傾向も見られた⁵。そのため、対面授業とオンライン授業を効果的に組み合わせる「ハイブリッド型」が注目できるといえる。

「ハイブリッド型」は「ブレンデッド・ラーニング」「ブレンド型」とする場合もあるが、「ブレンド型授業は、授業の目的にあわせて対面、オンラインを選択するため教育効果が高く、対面での反応とオンラインでの反応の両方を確認しながら授業を進めることができるため、教員にとっても授業が実施しやすい」⁶という指摘もあり、今後も教員・学生双方に過度な負担を生じさせることなく学びを深めていくことができるといえるため、大学の授業での導入はますます拡大していくだろう。

そこで本稿では、「ソーシャルスキル演習」におけるオンラインおよびハイブリッドによる演習での受講生による自己評価の変化について比較し、検討を行う⁷。なお本稿では、対面とオンラインを組み合わせた授業形態を「ハイブリッド」と呼称する。

II. 2021年度の授業内容

2021年度の構成自体は前年度を踏襲した。ただし、授業形態について、宇都宮大学では基本的に対面とオンラインを交互に実施する「A・B日程」⁸方式がとられたが、演習や実習科目については柔軟に対応することとなったため、個人作業やオンライン上での意見等の提示となるような回についてはオンライン、プレゼンテーションや提示された意見に対してのディスカッションが必要とされる回については対面とし、COVID-19感染拡大防止と学修効果の両立を図った。

表1 2021年度ソーシャルスキル演習の授業概要

授業回	対面/ オンライン	テーマ	内容
1	オンライン	オリエンテーション	ガイダンス、テーマに沿ったアイデア出し(各自)
2	対面	テーマに沿った話し合い	前回の内容をグループ内でシェア、教員によるコメント
3	オンライン	テーマに沿った話し合い	前回提出したレポートに対してグループ内で相互コメント
4	オンライン	具体的なスキル①-1	説得的・論理的な説明をするスキル
5	オンライン	個別・全体フィードバック	第2回課題に対して他グループや教員からのフィードバック
6	対面	具体的なスキル①-2	比較・反論のスキル
7~8	対面	具体的なスキル②-1・2	ディベートによる説得的・論理的な説明をするスキル、比較・反論のスキルの実践
9	オンライン	具体的なスキル③	リフレクションのスキル ※基盤教育センター・石井和也准教授による
10~12	対面	プレゼンテーション準備①②③	プレゼンテーションに向けた議論、スライド作成等
13~14	対面	プレゼンテーション①②	プレゼンテーションとフィードバック
15	オンライン	プレゼンテーションの振り返り	他グループや教員からのフィードバックを活用した振り返り、数値評価(グループと個人)、まとめと講評

2021年度も2020年度同様に、本科目のアクティビティであるグループワークを中心とした実施方法であった。しかし、教室の座席が「市松模様」の配置となっていることに加え、各自はアクリル板で仕切られており、2019年度以前のような相互に自由に発話させる形態はとりづらい状態であった。また、一定程度の対面授業が可能となったとはいえ、COVID-19への警戒⁹も必要とされるため、対面による他者とのディスカッションや意見交換が必要な場合と、オンラインでそれぞれがしっかりと調査・考察させる場合とを慎重に検討した。

そこで、今年度もLMS¹⁰を活用しながら授業を構成していくこととした。前年度は「協働板」および「レポート」を活用した「文字による話し合い」を行ったが、今年度もそれら2機能を活用しつつ、対面での話し合いが可能となったことを受け、構成を授業テーマごとに見直した。本科目で今年度取り組んだ授業形態は「ハイブリッド」であるが、これは授業で扱うテーマについて対面とオンラインの複数の授業回を組み合わせる場合と、各回のうち対面授業中に学生がPCやタブレット等を通じて課題に取り組む場合の両方を指している。表1で「オンライン」とあるのはいわゆる「オンデマンド形式」であり、所定の期日までに課題提出を行うものである。「対面」となっている回では実際に教室で課題に取り組む際に、LMS上でレポートを共有したり、それぞれが調査してきた資料や情報を共有したり、その回での課題提出を行ったりしたものである。

「テーマに沿った話し合い」(第2・3回)では、「レポート」内容への質問や補足を対面時に行

い、班員から「レポート」にてコメントを提出させ、それらの内容を教員側でとりまとめて「協働板」で班員全員に提示し共有した。このことにより、他者の考えに触れ、自らの考えを広げたり深めたりすることを目指した。「具体的なスキル②」(第7・8回)ではディベート形式を基にして構成した。ディベートでは通常、事前に提示されたテーマに沿ってあらかじめそれぞれの主張を準備した上で、「立論・反駁・結論」を60分程度で行うことが多いが、ここでは時間をかけて十分に検討させるため、反駁は省略し、アイデア出し・立論・質問および回答・結論に分けて実施した。具体的には、1) 班員それぞれがアイデアを授業前に「協働板」に提示、2) それを基に対面にて話し合った上で、班としての立論を「協働板」に提示、3) 立論に対する質問を提示し、授業前までに回答、4) 授業時間中に相手の立論や質問を対面で検討した上で結論を「協働板」に提示、5) 聴衆となっている班は「アンケート」にコメントとともに投票、とした。ディベートにおいては制限時間内に賛成側・反対側がそれぞれテンポ良く議論することが「見所」ではあるが、今回は即時性よりむしろ相互の立論をしっかりと確認し、反駁となるような調査や検討を班の中で行った上で多角的・論理的に説得力のある内容を示すことに重点を置いた。

プレゼンテーションについては2019年度以前のように2回実施ではなく、2020年度から引き続き1回とした。全てオンラインで実施した2020年度に関する分析¹¹⁾において、自己評定値について例年の対面授業と同程度の評価が得られていることが示されたが、これは指示した課題への取り組み状況が、氏名やタイムスタンプを含めて班員同士で明示的に共有されることから、授業への参加が自覚されやすく、議論への参加が促されたことが可能性として指摘できた。これを受けて、オンラインおよび対面で一つの課題に時間をかけアプローチを変化させて取り組ませることにより、さらに学修効果が高まることを期待したものである。

Ⅲ. 学生による自己評価より

「ソーシャルスキル演習」では授業終了時に、授業目標に対応させた6項目について、受講による変化を、-1(やや後退)、0点(変化なし)～10点(非常に向上した)で自己評定させている¹²⁾(表2)。この自己評定は、本授業が初めて開講された2017年度から現在まで継続実施しているものである。なお、対面授業により、受講開始時に初回プレゼンテーションを行い、受講を経て2回目のプレゼンテーションを実施していた2017～2019年度については、初回から2回目のプレゼンテーションにかけての変化の自己評定を求めている。初回プレゼンテーションを実施しないように変更した、2020年度の全面オンライン授業および本稿にて報告する2021年度の対面+オンライン授業においては、受講前から授業終了時にかけての変化を問うように教示が変更されているが、評定項目そのものは2017年度から同一のものを使用している。

表2 ソーシャルスキル演習授業終了時における教示内容と自己評定項目

<p>【2017年度～2019年度（対面授業）における教示】※プレゼンテーション2回</p> <p>・初回と2回目を比較し、自分としてどのような変化があったかの評価を、-1（やや後退）、0点（変化なし）～10点（非常に向上した）で評定してください。</p>
<p>【2020年度（オンライン授業）、2021年度（ハイブリッド授業）における教示】※プレゼンテーション1回</p> <p>・受講前と今を比較し、自分としてどのような変化があったかの評価を、-1（やや後退）、0点（変化なし）～10点（非常に向上した）で評定してください。</p>
<p>【自己評定項目】</p> <p><事前の話し合いについて></p> <p>Q1. 様々な視点から、たくさんの意見（アイデア）を出すこと</p> <p>Q2. 出てきた意見について、複数の視点から議論すること</p> <p>Q3. 議論を通して、合意形成をすること</p> <p>-----</p> <p><プレゼンテーションの準備について></p> <p>Q4. 内容のわかりやすさについて検討すること</p> <p>Q5. 異なる意見の人にも説得力をもつ論理的な構成について検討すること</p> <p>Q6. プレゼンテーションの内容について自分が十分理解すること</p>

対面+オンライン授業を実施した2021年度における自己評定結果について、対面授業（2017～2019年度）、全面オンライン授業（2020年度）のものとあわせ、表3、図1に示す。

表3 「ソーシャルスキル演習」受講者の自己評定の平均（SD）

授業形態	対面			オンライン	ハイブリッド (対面+オンライン)
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
開講年度					
受講者数	n=54	n=52	n=53	n=51	n=51
<事前の話し合いについて>					
Q1. 様々な視点から、たくさんの意見（アイデア）を出すこと	5.00 (2.33)	4.73 (2.83)	4.96 (2.85)	5.18 (2.28)	5.98 (2.60)
Q2. 出てきた意見について、複数の視点から議論すること	4.76 (2.16)	4.40 (2.66)	4.53 (2.63)	4.98 (2.22)	5.37 (2.01)
Q3. 議論を通して、合意形成をすること	5.76 (3.23)	5.15 (2.78)	4.47 (3.17)	5.88 (2.15)	6.43 (1.94)

<プレゼンテーションの準備について>					
Q4. 内容のわかりやすさについて検討すること	4.72 (1.99)	4.29 (2.67)	4.06 (2.97)	4.96 (2.00)	5.08 (1.87)
Q5. 異なる意見の人にも説得力をもつ論理的な構成について検討すること	4.63 (2.01)	3.65 (2.38)	3.38 (2.85)	4.78 (2.39)	4.69 (2.10)
Q6. プレゼンテーションの内容について自分が十分理解すること	6.65 (3.12)	5.46 (3.21)	5.81 (3.49)	6.63 (2.47)	7.55 (2.00)

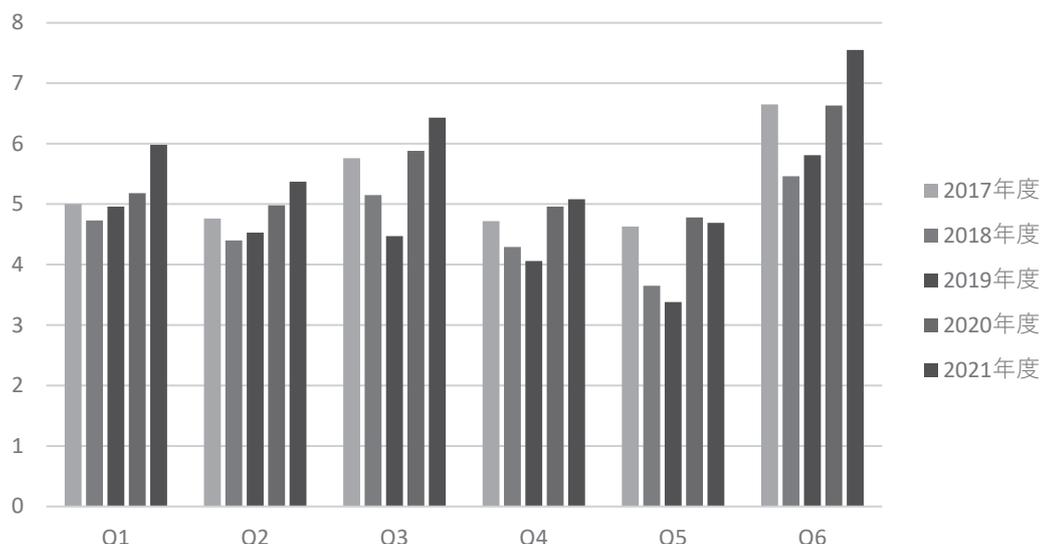


図1 各項目における年度ごとの「ソーシャルスキル演習」受講者の自己評定の平均点

注) 対面授業：2017～2019年度、全面オンライン授業：2020年度、対面+オンライン授業：2021年度

対面あるいはオンラインによる一貫した授業形態を維持した2017～2020年度と比較し、対面とオンラインを併用した2021年度における自己評価は高い水準を保っていた。参考として、項目ごとに評定値を従属変数、年度を独立変数とした一要因分散分析を行ったところ、特に、Q6「プレゼンテーションの内容について自分が十分理解すること」については、対面により開講した2018年度および2019年度よりも、対面+オンライン授業を実施した2021年度の評定値の方が有意に高いことが示された。対面とオンラインの併用により、対面時の口頭でのやり取りとオンライン時の主に文字でのやり取りが相補的に機能し、グループ活動の集大成としてのプレゼンテーションへの主体的関与を受講者が実感しやすくなった可能性はあるだろう。

IV. 効果と課題

2020年度の分析では、LMS上で氏名・発言（投稿文）¹³が明示的になることから、「フリーライダー」といったグループワークへの関与に消極的である受講生への対応となることが指摘できた。これは前述のように、授業や課題への関与が相互に実感できることがその要因として挙げることができることが明らかとなった。また、オンライン受講時、議論の過程においては、勘違いや認識不足による記述、最終的に採用されなかった複数のアイデアに対して、「意見の多様性」として発展的に捉えていくような視点の必要性を課題として提示したが、対面での議論が行えることにより、個々の認識の訂正や、文字では説明しきれなかったアイデアのニュアンスなどがグループ内で共有できた可能性も指摘できる。

Q3・4・5について、対面のみの講義であった2019年度以前¹⁴⁾に比べ、自己評定が幾分高くなっているが、これに関しても前述の授業の関与への実感が影響していると考えられる。加えて2020年度よりプレゼンテーションを各グループ2回から1回に集約し、テーマについて各回の到達目標を示すことでより段階的に検討させ、さらに、説得的・論理的説明のスキル、比較・反論のスキル、リフレクションのスキルといった具体的なスキルについても丁寧に取り組ませたことも結果に関与しているだろう。

ここで、対面のみであった2019年度以前に比べて、2020・2021年度とも、自己評定が低くならなかったことは注目すべきであろう。特に2020年度は本学のみならず、全国の多くの大学において、十分な時間的余裕がないまま、学生の学びの質を可能な限り維持していく方法を模索していた。その中で元々は対面で実施することを自明のものとして組み立てていた内容を、オンラインによるスキル養成、そして対面とオンラインを適切に組み合わせたハイブリッドによるスキル養成を行うこととなった。そのため、今回結果的には自己評定が高くなったということが出来る一方で、このような授業構成としたのはこの2年のみであるため、どの要素が好影響を与えたのかについて今後のデータを丁寧に分析していく必要があるといえる。

2021年度については、前年度よりは緩和されたとはいえ、COVID-19の感染拡大状況に授業形態が左右されてしまった。そのため常に全面オンライン化の可能性を念頭におく必要があったため、必ずしも学期開始前に構成した授業方針が維持できるとは限らなかった点が常に不安材料としてあったといえる。そのため、オンラインで事前課題に取り組み、対面時にそれを基に進める「反転授業」としてのブレンデッド・ラーニングへ向け、より適切な授業回やそれらの組み合わせを今後も検討を進めていく必要がある。

注

- ¹ 宇都宮大学地域デザイン科学部では総授業時間数の60～100%を「アクティブ・ラーニング」としている場合を「AL80」と分類し、シラバスに明示している。
- ² 白石智子、若園雄志郎、桑島英理佳「地域デザインに必要なソーシャルスキル養成科目の実践と課題」(『宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要「地域デザイン科学」』第3号、2018、pp79-86)
- ³ 若園雄志郎、白石智子「地域デザインに必要とされるスキルの養成に関する複数科目における実践「ソーシャルスキル演習」と「ワークショップ演習」を通じて」(『宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要「地域デザイン科学」』第5号、2019、pp109-115)、および、若園雄志郎、白石智子「地域デザインに必要とされるスキルの養成に関する複数科目における実践(その2)―「ソ

- ーシャルスキル演習」と「ワークショップ演習」を通じて―」（『宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要「地域デザイン科学」』第7号、2020、pp89-95）。
- 4 「ひらく 日本の大学 2020年度調査結果報告」（『Guideline』2021.2・3、河合塾／全国進学情報センター、2021）、p4。
 - 5 同上。
 - 6 田口真奈「授業のハイブリッド化とは何か 概念整理とポストコロナにおける課題の検討」（『京都大学高等教育研究』26、2020）、p70。
 - 7 2019年度までの対面による演習と、2020年度の全面オンライン授業についての分析は、白石智子、若園雄志郎『地域デザインに必要とされるスキル養成科目の効果と課題—オンラインでのアクティブ・ラーニング実践を通じて—』（『宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要「地域デザイン科学」』第9号、2021、pp51-58）を参照。
 - 8 2021年度の授業については、対面授業実施時、学生同士の距離を確保するため、相互に隣り合わないよう教室内の座席配置を「市松模様」にするという方針が示された。これにより教室の収容人数は約半分となったため、受講者を収容できない教室が増え、座席数が多い教室を週替わりで複数の科目で交互に使用せざるをえなくなった。そこで、基本的に1・3年生の科目はA日程（第1回が対面、第2回がオンライン、以降同様）、2・4年生の科目はB日程（第1回がオンライン、第2回が対面、以降同様）とし、教室の確保を行った。
 - 9 栃木県では本科目の授業期間中（4月15日（第1回）～7月29日（第15回））に緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置のいずれも発出されなかったが、近隣自治体である埼玉県では4月20日からまん延防止等重点措置（8月2日より緊急事態宣言）が発出されていた。そのため、十分に警戒する一方で、いつそれらが発出されても対応できるようにしておく必要があった。
 - 10 本学におけるLMSはネットマン社「C-Learning」を使用している。若園・白石2020も参照されたい。
 - 11 前掲、白石智子、若園雄志郎、2021。
 - 12 受講生へは、報告した評定値が成績評価に関係しないことを伝えている。
 - 13 これに加え、投稿日時も表示されるため、発言の順序関係も一定程度把握可能となる。なお、教員側の設定により匿名での投稿も可能であるため、課題やトピックによって使い分けを行っている。
 - 14 2019年度について、2018年度と授業内容に大幅な変更はなかったため、その年度の結果のみを取り出しての考察は適切ではない。